４あの子のカーネーション（伊集院 静）

―十歳の頃の冬、父から風呂きに使う薪割りを教わった。……

　「木の目にそって刃を当てなきゃ駄目だ。ほらっ、しっかり握ってないと、指が飛んでしまうぞ。」と脅されたり、𠮟られながら作業をした。二十分もすると身体がポカポカとしてくる。大きなで作業をしている父は、いつの間にか上半身は肌着姿になっていた。空に向かって大斧を振り上げる父が大男に見えた。先刻まで［　Ⅰ　］としていた庭の空気が、秋の晴れ間のように膨らんだ空気になっていた。だが①そのうち手が持ち上がらなくなる。斧がこんなに重かったかと思えてくる。指がぎこちなくなって、思うように動かない。自分の手ではないように思えてきた。

　「休むな。これだけやってからだ。」と父が木の山を指さして言う。あわてて次の木を台の上に置く。初めのうちは、男の仕事をしているんだと妙に喜んでいたが、次第に嫌なことを手伝わされているように思えてきた。二時間程した頃に、母がお茶と菓子を持って現れた。

　「ひと休みするか。」父の声で、それぞれの台の上に腰掛けて菓子をほおばる。休憩できることとの甘さで、急にしくなったのを覚えている。

　次の年は、弟が加わった。私は大きな斧を持たされた。弟は前の年に私が使った小さな斧を父から渡された。をしてると指が飛ぶぞ、と私が言われたことと同じことを弟も父から言われる。私の大きな斧は手斧より重いし、狙ったところになかなか刃を振り降ろせない。「もっと足を踏んばれ。腰を落として斧を振り上げるんだ。腹に力を入れろ。」と父が私に言う。

　翌年から、私と弟で薪割りをさせられた。二人だけでは、ひどく時間がかかった。木はひとつひとつ木目が違う。スパッと割れるものもあれば、固くて斧が入らない木もある。それでも不思議なもので、ひと冬薪割りをすると、一見割れにくい木も、どの辺りに刃を入れれば割れるかがわかってきて、コツのようなものが見えてくる。それに前の年に重かった斧が軽いことにも気付く。

　「このコッパは楽だな。」とそばで弟がひとり言を言ったりする。作業をした夜、弟と風呂に入ると、「自分で作った薪の風呂は格別でしょう。冬支度をしていただいて……。」と釜口から母の声がした。二人とも一人前の男になったようで、どこか②むずがゆい気持ちになった。お互いのをひらいて、赤くなった指の付け根を見せ合ったりした。

　ひとつのことをずっと続けていると、③自然に見えてくるものが世の中にはあるのだろう。うまく仕事が運ばなかったり、自分には無理だと感じた時でも、そのうち木の目が見えてくるし、  
斧も軽く思えるはずだ。

問１　右の文章を、時間の経過によって三つの部分に分けるとすると、二つ目、三つ目はそれぞれどこから始まるか。それぞれの最初の五字ずつを抜き出して答えよ。

二つ目＝〔　　 　　　　〕

三つ目＝〔　　 　　　　〕

問２　［　］Ⅰに入ることばとして、最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　しみじみ　　イ　ほのぼの　　ウ　冷えびえ　　エ　ぬくぬく

問３　―線部①とあるが、この後「私」の薪割りに対する気持ちはどのように変化したのか。文中から一五字以内で抜き出して答えよ。

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 〕

問４　―線部②について、その「気持ち」を引き出した母のことばを、文中から五字で抜き出して答えよ。

〔　　　　　　〕

問５　―線部③とあるが、どのようなものが見えてくるのか。文中から八字で抜き出して答えよ。

〔　　　　　　　　　〕

問６　筆者が薪割りの体験を通じて感じ取った教えを、三〇字以内で具体的に述べよ。

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

【解答】

問１　二つ目＝次の年は、

　　　三つ目＝翌年から、

問２　ウ

問３　嫌なことを手伝わされている（13字）

問４　いただいて

問５　コツのようなもの

問６（例）無理だと感じたことも、続けるうちに自然とできるようになる。

（29字）

ポイント

問１　父から薪割りを教わった、十歳の頃の冬。時間の経過に従って、「次の年」、そしてさらにその「翌年」とある。

問５　ひと冬薪割りをすると、……コツのようなものが見えてくる。→ひとつのことをずっと続けていると、自然に見えてくるものが……ある。